千歳空港物語 その1

千鷲会だより編集部

今年は千歳空港開設95年、昭和26年千歳飛行場に民間航空機が飛来して70年、我々と関りの深い千歳飛行場の遷り変りを千歳市史から紹介します。

千歳飛行場は大正15年10月に村民の勤労奉仕で完成したことはよく知られている。

この飛行場を作るきっかけとなった話がある。～大正5年頃、千歳村村長山田亘、郵便局長中川種次郎、村議渡部榮蔵（山三ふじや創業者）は千歳村南方のサンナシ（エゾノコリンゴ）沢に盆栽用アカマツの苗木を伐採しに出かけ「広大な火山灰地の活用方法として飛行場でも出来ないものか」と冗談話をしたと言う～

※サンナシ沢は自衛隊西側滑走路北端辺り？

大正2年頃、北海道各地で興行飛行が行われていたが、飛行機は分解され鉄道貨車により移動、離発着は練兵場や農地であり飛行場と呼ぶには足らなかった。

※北海道初の専用飛行場は大正14年完成の十勝音更飛行場（130m×20m）昭和4年に閉鎖。

大正期、北海道では北海タイムスと小樽新聞社が紙面を競い合い、販売競争上からも大正15年に小樽新聞社は「北海」北海タイムスは「北斗」の飛行機をそれぞれ保有するに至った。

また、大正15年8月には、千歳・美々の両駅が開業、1日各上下5本の貨客混合列車が運行、千歳～苗穂間の所要時間は1時間30分であった。

【着陸場建設の発端】

千歳駅開業直後の9月、小樽新聞社社員が千歳村役場を訪れ「鉄道開通した千歳において約300名の参加者を募って孵化場見学後、千歳神社山で昼食会を開く計画がある。村役場に湯茶の接待をお願いしたい」というものであった。

当時、千歳には一軒の飲食店もなかったが、役場は「千歳特産の山ぶどう、馬鈴薯、三平汁を用意しましょう」と応えた。

この対応に感激した新聞社社員は「我社には購入したばかりの社機があるので、当日汽車の到着に合わせ社機を千歳上空に派遣し、謝恩の意を込め宣伝ビラを空中散布しましょう」と発言した。

役場は「折角、千歳上空まで飛んでくるのであればその社機を着陸させて、是非真近で見せて欲しい」と頼み込んだ。

当時、飛行機はまだ珍しく興行の対象になる時代であり役場の頼みは、着陸する場所もなく途方もない注文であった。

社員は役場の意向を社及び飛行士に伝えることを約束して帰っていった。

数日後、小樽新聞社の社員と共に24歳の酒井憲次郎飛行士が千歳役場を訪れた。

※当時の着陸場は現在の矩形でなく、どの方向からも離着陸できるよう四角形であった。

早急に着陸場を造らなければならない。村民の労力奉仕を仰ぐこととし、着陸場建設の村民大会が開催された。

議題は「着陸場を造るか否かの件」提案説明は次のとおりであった。

「もし札幌へ飛行機の活動写真を見に行くとすれば、汽車の往復料金と昼食代で1回3円はかかる。1日の出面費が1円20銭として2日、1戸から1人整地作業をしてくれれば珍しい飛行機を見ることができる、着陸場を造成するか否か」提案は賛同を得た。

斯くして、飛行機を見るため、青年団・婦人会・小学生までもが鋸・鍬を手に抜根などの整地作業に汗を流した。

作業の中心的な役割を果たしたのがサンナシ沢で飛行場でも作ろうかと話した3人であった。

整地作業の日付は不明であるが、2日間で150人の動員があった。

完成後、酒井飛行士が着陸場を確認し、検査に合格した。

【1番機の着陸】

飛来は、孵化場見学・昼食会の開催された10月17日に行われる予定であったが雨天のため延期。

22日午後1時過ぎ、澄み切った秋空のもと、北海1号機が西北の方向から侵入し、人々の歓呼に応えるかのように旋回しビラを撒いた後、大地をなめるよう緩やかな角度で進入し着陸場の1／3も使わずに着陸した。

※10月23日付小樽新聞に「地上に起こる万歳の声、熱狂する村民蝟集」の見出しで、消防団・青年団・千歳村近郊の官民有志数百、千歳・恵庭・北広島・沼ノ端・苫小牧の一般観覧者5千、近村の小学校生徒2千など、1万近い観衆が集まったと紹介している。

当時、千歳村は人口5千。

【2番機の飛来】

昭和2年8月26日、北海タイムス社機北斗5号機が飛来、操縦士の永田飛行士は植土と泥炭の軟弱な札幌北24条の札幌飛行場と比べ、千歳の飛行場は広々とした火山灰地が飛行場適地で感激したと伝えられている。

以後、村民の勤労奉仕を基本として昭和10年2期工事、翌11年3期拡張工事を行い、陸海軍に誘致運動を推進、昭和14年念願だった海軍飛行隊の開庁に繋がった。

-酒井憲次郎-

明治36年7月生

▲大正11年3月、航空局陸軍依託第3期操縦生課程に10倍の難関を突破して合格

▲大正14年、1等飛行機操縦士技倆証明書取得

▲大正15年8月、小樽新聞社入社、12月退社

▲昭和2年1月、朝日新聞社入社

▲昭和3年、日本国内最高の飛行時間・距離を達成し、国際飛行連盟が最優秀飛行士として「ハーモン・トロフィー」受賞

▲昭和7年9月15日、満州～大阪の飛行中、日本海にて殉職29歳。

▲平成14年、北海1号機の功績を称え、千歳市空港公園に酒井操縦士像が建立された。

-次回に続く-

千鷲会の会員数（1月15日現在）

正会員　539名

賛助会員

団体　18社

個人　18名

物故会員

5月　小松　鶴男　（北光）

6月　田中　脩嗣　（北斗）

7月　髙橋　匠　（新富）

8月　中村　定夫　（北斗）

9月　猪狩　治郎　（住吉）

10月　福山　秀雄　（住吉）

10月　荒井　誠　（北栄）

12月　鶴野　良雄　（錦町）

1月　山上　登生　（新富）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

【編集後記】

千歳空港は村民の勤労奉仕で完成したのは知っていたが、きっかけとなったエピソードがあったのは知らなかった。

また「日本で唯一、飛行場があるオラが村」という誇りが、村民の勤労奉仕の原動力となり、先人たちの汗と努力が基礎となって千歳空港が発展してきたことに感動を覚えた。